

# 漢字とひらがなのフォントサイズ差が 文章理解に与える影響

合路 達美

(広島国際大学大学院心理科学研究科)

## 目的

漢字は内容語であり、文章における重要な情報を内包している割合が高い。また、漢字は表意文字と呼ばれ、黙読時の有意味語処理では、音韻処理より意味処理が先行されるとして処理速度や語彙決定の容易さが述べられている(御領, 1987)。そこで漢字をひらがなより大きく呈示することで文章の長さに関わらず、理解度や読み速度が促進されると考えた。漢字とひらがなのフォントサイズ差を独立変数として、この手法による効果の検討を目的とする。

## 方法

**実験参加者** 広島県内の大学生 30 名(男性 12 名, 女性 18 名)に協力してもらった。

**手続き** リーディングスパンテスト(苧坂, 2002)を用いてワーキングメモリーを測定した。この成績をもとに 3 群(図 1)に振り分け、均一化を図った。

無操作群(文字サイズ10.5pt): 太郎は母親に頼まれた。  
ひらがな縮小群(ひらがな9.0pt): 太郎は母親に頼まれた。  
漢字拡大群(漢字12.0pt): 太郎は母親に頼まれた。

図 1 各群の文字表示例(文字サイズ)

**短文課題** 20 字程度で主語・述語・目的語を含むものを 12 文作成した(例:太郎は母親に頼まれた)。短文では理解度の指標として正誤判断課題を用いた。この課題は、主語と述語を含む内容を抜き出して作成したもので、短文の内容と合致するかを問う問題であった。短文時の手続きは以下の通りであった。  
①目を閉じた参加者の前に短文を置く。②実験者の「始め」の合図で黙読を開始し、読み時間を計測する。③読了後、正誤判断課題(各 1 問)を呈示する。

**長文課題** 180 字程度の文章を 6 文用意した。長文では、正誤判断課題とは別に逐語記憶課題を追加し、この 2 つを理解度の指標とした。逐語記憶課題は、

文中に全く同じ文があるか判断させる問題であった。長文時の手続きは、呈示する文章の長さや課題が異なることを除き、短文時の手続きと同様であった。

## 結果

読み時間では、短文・長文ともに群間に有意差が見られた(短文:  $F(2,27) = 17.60, p < .001$ ; 長文:  $F(2,27) = 5.28, p < .05$ )。多重比較の結果、文章に関わらず、ひらがな縮小群、漢字拡大群ともに無操作群より読み時間が短いことが示された(図 2)。正誤判断課題や逐語記憶課題の正答率では、短文・長文ともに群間に有意差は見られなかった。

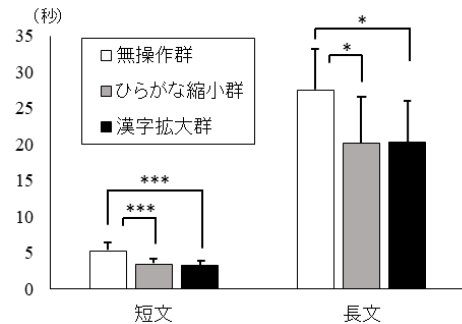


図 2 各群における短文と長文の読み時間(秒)

## 考察

本研究では、漢字をひらがなより大きく呈示することで文章の長さに関わらず、理解度や読み速度が促進されると考え、この手法による効果を検討した。文字操作を行った文章の方が読み時間が短いことから、この手法によって読み速度が促進されることが示された。この要因としては、情報を内包し、意味処理が容易な漢字が大きく呈示され、文章情報を一目で把握しやすくなったことが考えられる。正誤判断課題と逐語記憶課題で群間に差が見られなかった要因としては、天井効果と新近効果の可能性もある。

## 引用

御領謙(1987). 認知科学選書 5, pp.121-150. 他